昭和30年頃の北軽井沢駅

vol.06

見る 知る 歩く
ジオなまち
ながのはら

懐かしの高原列車

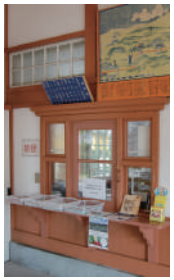
草軽電鉄「北軽井沢駅」物語

［旧「北軽井沢駅」駅舎（国の登録有形文化財）］

今から55年前の昭和37（1962）年までの半世紀、軽井沢・草津温泉間 55.5kmを結ぶ列車が走っていました。高原列車「草軽電鉄」の記憶が少しずつ忘れ去られようとしているなか、当時の繁栄を今に伝えているのが、旧「北軽井沢駅」です。復元・保存されている駅舎を訪ねながら、100年を遡るタイムスリップの旅を楽しんでみませんか。

正面玄関のある北面（上）と、かつては売店のあった西面（下）。約10年前に補修され、朱色の屋根と白漆喰塗りの壁も復元。エントランスの欄間には、駅舎を寄贈した法政大学のイニシャル「H」の文字がデザインされている。

昭和4年のものと思われる建設中の写真。善光寺をモデルにしたと言われる入母屋造りと、格子状の窓を組み合わせた独特の和洋折衷形式のデザインが特徴的。宮大工の経験を持つ地元建設会社が手がけた。（写真：北軽井沢観光協会所蔵）



（右）電気化により導入された「デキ12形」。パンタグラフが長く、カブトムシが角を突き出しているように見えることから「カブトムシ」の愛称で親しまれた草軽電鉄のシンボル。平成22年、地元団体により木製の実物大模型が製作され展示されている。（左）復元された駅舎内や、隣接する北軽井沢観光協会には鉄道に関する資料が展示されている。

現在の旧・北軽井沢駅舎

浅間高原の歴史を拓いた全長55㎞の高原列車。

軽井沢と草津温泉を結ぶ観光客の足として、また草津白根や沿線から運び出される硫黄や木材・薪炭などの貨物輸送を目的として、1915（大正4）年、「草津軽便鉄道」が誕生しました。開業時、新軽井沢～小瀬温泉間のみだった路線は順次延長し、1926（大正15）年には草津温泉までの全長55.5㎞が開通します。

当初は小型蒸気機関車が2輌の客車を引いていましたが、1924（大正13）年に電気機関車へと切り替え。浅間山を抱く風光明媚な高原を、片道3時間半かけてゆっくりと走る鉄道は、映画の舞台にもなるなど全国的に人気を集めます。1939（昭和14）年には「草軽電気鉄道」（以下「草軽電鉄」）と改称し、乗客の増加にあわせて客車も増備。終戦直後の1946（昭和21）年には年間46万人もの乗客を記録しました。

しかし、国鉄長野原線の開通や急速な自動車輸送の発展、そして相次ぐ台風被害により、草軽電鉄の経営は行き詰まります。地元住民の存続運動や群馬・長野両県による経済的支援も効をなさず、惜しまれながらも、1962（昭和37）年に全線が廃止。およそ半世紀の歴史の幕を閉じました。

廃線後に駅舎が辿った数奇な運命。

草軽電鉄の廃線から55年が経ち、鉄道の面影はほとんど見られなくなってしまいましたが、そんななか、今でも当時のままの姿を残す建物があります。新軽井沢～草津温泉間に約22あった駅のうちのひとつ、「北軽井沢」駅の旧駅舎です。

「北軽井沢」駅の前身は、「地蔵川」と呼ばれる小さな停車場でした。1928(昭和3)年、地蔵川地区内に法政大学村が開村したことに伴い、大学村からの寄付により駅舎を新築、軽井沢の北側にあることから駅名も「北軽井沢」と改められました。(この駅名が「北軽井沢」という呼称の始まりとされています。)

避暑地・別荘地として、また鬼押出しや照月湖などが観光スポットとして注目されたことから「北軽井沢」駅の利用客は増加。周辺には宿や土産物屋、飲食店もできるなど、駅を中心に町が形作られ、特に夏場は多くの観光客でにぎわいました。

廃線と同時にこの駅舎も一時は廃屋寸前となりますが、このまま潰れてしまうことを惜しんだ元「北軽井沢」駅員で北軽井沢在住の黒岩謙さんが、草軽電鉄より建物を借り受けます。建物本体には影響しない範囲で、自ら修復・改装を行い、昭和47年から平成13年までの約30年間、喫茶店・スナックとして活用。2006(平成18)年、長野原町に委託されたのち、改めて改修工事が行われ、翌年「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として国の登録有形文化財に指定されました。

数奇な運命を辿った「北軽井沢」駅舎は今もなお、浅間高原のランドマーク的存在として、訪れる人に在りし日の鉄道の記憶を伝え続けています。

(上)喫茶店・スナックとして使われていた当時の駅舎内。
(下)元駅員で駅舎の保存に尽力した黒岩謙さんと、現在、駅舎を拠点に北軽井沢の魅力・情報発信を行っている、地域おこし協力隊のウッド美幸さん。

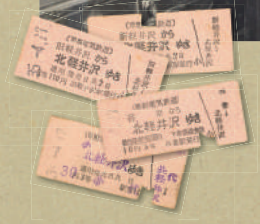
◎今回訪れたのは… 旧「北軽井沢駅」駅舎(国の登録有形文化財)

※特別なことわりのない古い写真はすべて黒岩謙さん撮影(北軽井沢観光協会所蔵)
参考文献:「長野原町誌」、「きたかる(VOL.2)」「思い出のアルバム 草軽電鉄」(郷土出版社)、「草軽 のどかな日々」(宮田道一著/ネコ・パブリッシング)

★鉄道写真愛好家による草軽電鉄の写真展が開催されます。
「写真展 草軽高原を往く」 会期:9月10日～24日　場所:旧草軽電鉄北軽井沢駅舎

内部から写した窓口の様子(左)。「軽井沢から国鉄に乗り換え、全国各地に向かう切符まで取り扱うため、料金を計算するのが大変だった」と、元駅員の黒岩謙さん。当時の切符販売機の実物(右)は、北軽井沢観光協会に展示されています。

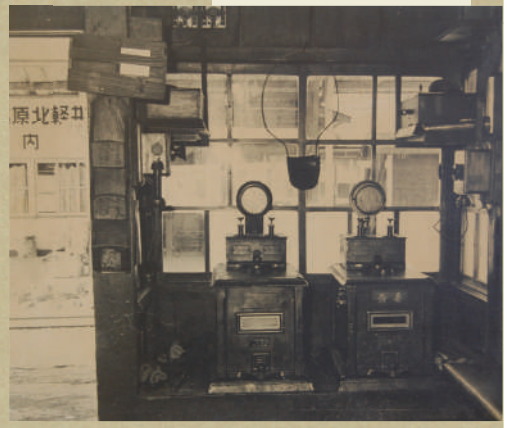
窓口内部を写した貴重な写真!



北軽井沢駅 思い出写真館

ホームに面した一画には「タブレット」を操作する機械が置かれていました。「タブレット」とはいわば通行許可証のようなもの。単線区間での双方向からの衝突を防ぐため、駅と駅の間にそれぞれ形状の違う円盤状の玉があり、運転士は駅員からそのタブレットを受け取らないと次の駅へ進めない仕組みになっていました。タブレットの交換も駅員の大切な仕事のひとつでした。

単線電車の運行を支えた「タブレット」



オシャレなパンフレット!

草軽電鉄が発行していた沿線パンフレット。当時の一大観光スポットといえば、国境平付近のツツジヶ原。レンゲツツジの咲くシーズンには、サマーカーと呼ばれる臨時の展望列車を増便し、多くの観光客で賑わいました。

(パンフレット:
北軽井沢観光協会所蔵)

ふるさと再発見 [6]

—文化財だより—

【立石坂事件(その①)】

立石坂事件は、今から185年前に起こりました。平成25年に大津老人クラブが新たに「立石坂事件の碑」を建立しましたので、事件の概要を2回に分けて紹介します。

天保3(1832)年8月25日、立石村坂ノ上において、水戸藩士外岡龍三郎と幕府勘定方山田寿之助とその家来篠原万蔵、石川勝之助との刃傷事件があった。外岡龍三郎は草津温泉への湯治の帰路で一里松とその側の下の茶屋を過ぎたところ、荒地検分御用のため草津へ向かう幕府勘定方山田寿之助一行が下座触れ(※)で上がってきた。下座を巡ってのやり取りで恥辱を受けた龍三郎は後を追い山田方の家来たちに切りつけた。多勢に無勢、奮闘空しく龍三郎は悶死、33歳だった。龍三郎の遺骸は草木原の観音堂に安置され、村人が昼夜交替で見守った(その②へ続く)。

次号は【立石坂事件その②】をご紹介します。

※下座触れ…貴人の通行に先立って先駆の者が下座するように触れて歩くこと。